

【姫路市立安室中学校】の取組

「ICTを活用した新しい時代の学び」に関する研究 ～ICTの日常化に向けて 生徒主体の取組～



1 取組の背景

本校は、生徒数 744 人、通常学級と特別支援学級を合わせて 24 クラスに及ぶ市内有数の大規模校である。市教育委員会が選定した Google for Education を導入し、一人一台の Chromebook と Google Workspace for Education を活用している。

姫路市教育委員会から ICT 支援員が週 3 日派遣されて学校に常駐し、ICT が苦手な教員のサポートなどを行っている。また毎週木曜日の 1 時間、ICT 担当教員と管理職、市教育委員会の指導主事（Meet で参加）も交えた会議を開き、取組の共有や今後の課題などについて話し合いを行っている。生徒会に ICT 委員会が設置されているのも安室中学校の先進的な取組の一つである。このような活動が評価され、2022 年には、Google for Education 事例校として認定された。

2 主な取組

(1) 安室中サイト

安室中学校には、生徒向けの内部ポータルサイトがあり、Google カレンダーや各学年のサイト、検温入力や欠席連絡フォームなどを一元管理している。安室中学校では、このサイトにアクセスし検温入力をすることから、生徒たちの 1 日が始まる。また、合唱コンクールの動画や結果など、さまざまな情報を生徒主体で入手できるようにして、生徒の ICT 利用の推進につなげている。



(2) 生徒会サイト

従来の生徒会活動では、各委員会のお知らせやアンケートの募集など、月に 1 度の生徒会放送でしか発信されることはなかったが、Google サイトを活用し、生徒会サイトを立ち上げ、各委員会の取組における反省や目標を各々のタイミングで閲覧できるようにした。現在では、生徒会役員の生徒は、「全校生が見やすく、わかりやすく、そして委員会に親しみを持てる全員参加の生徒会」を目指して、美化委員会や生活委員会のチェック項目リスト、図書室の利用状況、委員会からのアンケートなどを生徒主体で生徒会サイトにアップするなど、活用の幅を広げている。生徒主体で運営、閲覧をするなど、まさに ICT の日常化の取組となっている。



(3) 教職員用サイト、チャットの活用

本校では日報、検温、欠席連絡等業務に必要であるツールにアクセスするリンクを集めた教職員向けサイトを作成した。これにより、大幅なペーパーレス化の実現のみならず、活用にあたって不安を抱く教職員にもICTが身近なものになり、活用の場が広がった。また、本校では全職員がGoogle Chatで日々の情報を共有している。これにより、全職員がICTに触れ、活用しようとする姿勢が明確に表れた。また、業務改善が進み、様々な場面でICTを活用することで、教職員が生徒と接する時間が増えるとともに、教材研究等の時間も増え、今では授業にPCを持っていくのが当たり前で、ICTによる新たな学びの提供を推進している。



全職員向け

- ・校務支援
- ・office365
- ・職員用クラスルーム
- ・安室中学校HP (外部向け)
- ・安室中学校サイト
- ・生徒会サイト(生徒が随時更新中)
- ・事例で学ぶネットワール
- ・スタディサプリ

日々の使用

- ・日報
- ・検温
- ・検温入力
- ・欠席連絡
- 1年生
- 2年生
- 3年生

(4) ICT委員会

生徒主体の委員会活動において新たな取組となると、学校をよりよくするという観点から、監視や注意喚起などの取り締まり型の取組内容になりがちである。しかし、本校のICT委員会では、発足に関わった職員生徒共通で、「使い方を注意する委員にはしない。」をモットーに約2年間活動を進めてきた。発足当初は、いざ話し合いが始まると、「あんな使い方は駄目だ。」「こんなことばかりしている。」とネガティブな発言が生徒間で多く見られ、日々の委員の取組内容を決めていくことに、かなりの時間を要した事もあった。しかし、委員長がよりよい使い方や使うことを前提とした取組を進めたいとメッセージを投げかけ続け、時にはアナログに立ち返りながら、試行錯誤してきた。ICT委員会発足してからここまで、端末活用についての取り締まりを委員として取組んだことはない。また、教職員の想像を越えるような取組を続けてきた生徒たちからは、端末に触れる機会の重要性を気付かされる場面も多々あり、例えば、あえてアナログの紙媒体の掲示物を作りその中にQRコードを埋め込む事で、最終的には学校サイトの案内・周知を進めたり、授業で先生たちがアンケートをしているのを真似して、委員会の取組を振り返るアンケートを委員長自身が、自作する姿が見られた。これら生徒の取組に合わせて、教師側のアプローチも変化があり、以前まで教師の委員会に対するコメントは、取組方や状況の整理が多く見られたが、今では集まったデータの信用度や統計的な分析にまで委員会の中で踏み込むことが出来ている。このように、生徒の変化に合わせて、教師側も変化を求められた構図は、生徒主体でのデジタル活用を目指す本校の取組内容として、前向きに捉えられる事例である。

(5) 学習者用デジタル教科書の活用

本校では、令和4年度より、授業や家庭学習での学習者用デジタル教科書の利用が始まり、「個別最適」な学習が可能になった。特に、英語の学習者用デジタル教科書では、Chromebookのタッチ機能を活かし、画像や表などの資料を拡大して見たり、重要な部分に線やマーカーを引くなど、学習の跡も残すことができる。さらには、タップ一つで音声を聞いたり、解説を表示させたりすることができるようになり、一斉授業では、英語の音が聞き取れなかった生徒が、納得できるまで何度も聞き直して、読む練習をしたり、進んで文法事項の確認をするようになった。また、Google Classroomと合わせて活用することで、生徒の表現活動の幅を増やすこともできた。音読や発表の動画による提出、スライドやスプレッドシート、ドキュメントなどによる発表原稿の作成、共同編集機能を利用したグループの課題発表など、生徒が主体的にあるいは協働的に学ぶ場面の設定が容易になった。そして、それらの作品には、全てURLが生成されるため、生徒は、学習者用デジタル教科書の該当ページに、リンクを貼り付けることで、自身の学びの振り返りについても、紙ベース以上に遡って、簡単にできるようになった。生徒からは、「知りたい時に、すぐに音声や意味を確認することができる。」「読み上げ機能を使ってディクテーションを試みたら、リスニング力が高まった。」「Chromebook一台の中に、全教科書が入るのが楽しみだ。」など、概ね、前向きな意見を得ている。来日1年で、日本語運用能力がまだ十分でない生徒からも、「ルビが表示できて、説明の読み上げもできるので助かる。」との声を得ている。学習者用デジタル教科書の活用により一人一台のChromebookの利便性を、存分に活かすことができている。















3 変容

(1) 子どもの変容

さまざまな学校行事の際に共同編集機能でレポートを作ったり、英語の授業ではGoogleスライドを自分で作成しクラスメイトと共有するなど、ChromebookとGoogle Workspaceをスムーズに使いこなし、主体的な活動が行われている。ICTが得意な生徒の中にはGoogleスプレッドシートを使ってベルマークの点数を自動集計するシートを作成し、それが委員会の活動に広がったケースや、お昼の放送のリクエストやメッセージをフォームで募集し全校生に身近な番組作りにICTを活用するなど、生徒自身の発案による活用も進んでいる。



5組3班	
 メンバー	
	
	
	
	
	
	

(2) 教職員の変容

職員室は、日頃から「こんな使い方もできますよ。」といった会話が気軽に交わされる雰囲気です。ICTの活用が日常的なものとして浸透している様子が伺えます。ICT支援員のサポートもあり、教職員のスキルはもちろん、ICTの活用に対する意識も高まってきています。道徳の授業では、Google Jamboardを使って、クラス全員の意見を全員が見える形で集約し共有することもあります。ほかの授業では、Kahoot!という4択クイズを作成するアプリを使って、ゲーム形式で全員参加型の復習を行い、生徒の心をつかんでいる。実践例はこれだけにとどまらず、日々の授業では、それぞれの教職員がユニークな活用をしている。また、ICT担当職員は、Googleと連携した動画作成の研修を受講したり、Google 認定教育者試験を受験し、資格取得に挑戦するなど、ICTに関する知識を日々アップデートしている。さらに、これまで教職員の負担となってきた定期テストでの採点業務も、「デジらく採点」の導入や、Google フォームのテスト機能を使うなど、新たな試みが行われており、今後のさらなる業務改善が期待されている。



(3) 学校の変容

連絡手段を電話から Google フォームに変更したことにより、大規模校ゆえの朝の電話ラッシュが軽減され、業務改善につながっている。全校集会を Meet で行うのはもちろんのこと、進路希望調査や三者懇談の日程調査なども Google フォームを利用することで、教員のデータ整理などの負荷軽減となっている。また、昨年 11 月からは Google カレンダーの利用をスタートし、学校行事や弁当持参日などの情報を保護者が簡単に確認できるようにしている。また部活動によっては、Google Classroom で連絡を伝えたり、登校しにくい生徒との連絡のやりとりを Google Classroom で行うなど様々な場面で Google Workspace が活用されている。また、スタディサプリやタブレットドリルを導入し、生徒が家庭でも自主的に学習できるようにしたり、長期休暇中の課題として積極的に活用されている。

4 安室中学校が目指す「ICT を活用した新しい時代の学び」

これからの学びのスタンダードとして、Society5.0 時代を生きていく生徒が、主体的に、文房具と同様の感覚で ICT を活用できるような学校が求められている。

また、教職員の ICT 活用についても、教育活動において非常に重要であり、子どもたちの興味・関心を高め、創意工夫に満ちた授業への改善を図っていかねばならない。そのためには、日々研修を継続していかねばならないと考えている。今後も姫路市教育委員会をはじめ関係機関と連携しながら「教育の情報化」を止めることなく、魅力ある安室中学校をめざして歩んでいきたい。